

データが語る “いま”

本川 裕



第⑨回

アジアの家庭は くつろぎの場

生涯未婚率が上昇するとともに、高齢者のひとり暮らし世帯が増加している。日本人にとって家庭とは何か、これからも問われ続ける重要な問題である。

日本人がどのような家庭観をもっているかに関して、文部科学省の統計数理研究所が行った国際意識調査の結果を紹介する。設問は「家庭は、ここちよく、くつろげる、ただ一つの場所である」か、というものである。

欧米主要6カ国との比較を行った1990年前後の調査（7カ国国際比較調査）では、日本人は欧米人と比較して、家庭を憩える唯一の場と考える者が80.3%ともっと多いことが明らかとなった。ただし、欧米のなかでも、イタリア人は73.6%と日本人に近く、オランダ人は31.6%とずっと少ないなど、多様である点に留意する必要がある。

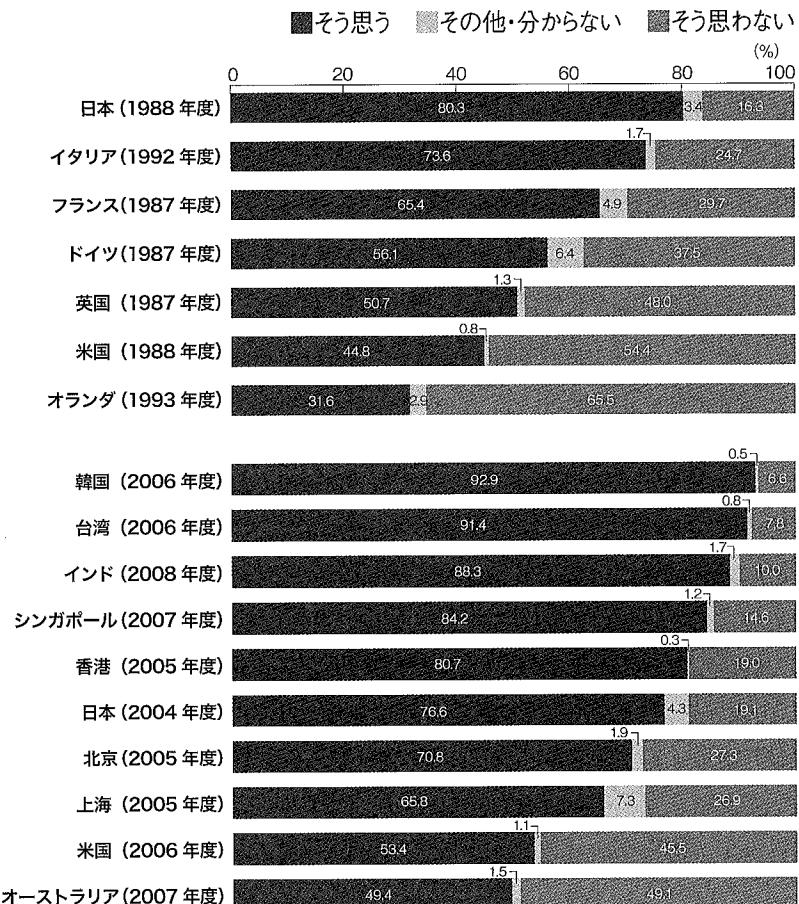
欧米では、くつろげる場は家庭だけではないと考えられている。友人たちとの集まり、教会で過ごす時間、地域の集会などが、くつろぎの場として重視されているのである。

一方、アジア・太平洋諸国の国民と比較した2000年代後半の調査（環太平洋価値観国際比較調査）では、日本人の家庭観は欧米と対照的なアジア共通の考え方である点、また、アジアの

7カ国国際比較調査
環太平洋価値観国際比較調査

図表 家庭は憩える唯一の場所か(国際比較)

「家庭は、ここちよく、くつろげる、ただ一つの場所である」という考え方に対して



(資料) 統計数理研究所「7カ国国際比較調査」(1985~1994年)、「環太平洋価値観国際比較調査」(2005~2008年)

なかで日本は、家庭をくつろぎの場とみなす傾向はむしろ弱いほうであるという点が明らかとなっている。家庭を憩える唯一の場と考える者は韓国人や台湾人の場合は90%を超えており、日本人の76.6%はこれよりかなり低い値となっているのである。アジアのなかでも北京や上海は日本よりさらに低く、欧米に近い。

日本人の家庭は、世帯員数が減り、

また相互の関係も希薄になりつつあり、いまのままでは何か頼りない気がする。未来の日本社会では、欧米のように、家庭以外にくつろげる場を見いだすのだろうか。それとも、家族のつながりや絆が見直され、家庭の機能が強まる方向をたどり、その結果として、くつろぎの場としての家庭が存続するのだろうか。日本人は果たしてどんな選択を行うのだろうか。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に従事。著書に『統計データはおもしろい!』(技術評論社)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日経プレミアシリーズ)など。